

## 「平和を大切にしよう」（マタイ五章三八〜四二節）

### 1 平和のために

今日も先週につづいてキリスト教学校の日としてキリスト教の学校にかよう学生さん生徒さんも交えて礼拝をささげたいと願っています。説教のほかに教会員の短いお話も用意しています。

また今日八月第一日曜日は教会では平和をおぼえ、平和を祈り願う「平和聖日」と定められています。これは私たちの教会だけでなく日本の教会の多くがそうしています。平和を祈る日をこうして若い方々と一緒に守ることができるのは非常に意義深いことです。

八月にこうした平和の日をもうける理由は皆さんもお分かりだと思います。いまから七三年前一九四五（昭和二〇）年、八月六日に広島、九日に長崎に原爆が投下されて、八月一五日に戦争が終わりました。日本は再出発を余儀なくされた。明治憲法に代わって新しい日本国憲法がつけられ、その前文に平和を維持し希求するとうたい、また第九条には、戦争はしない、戦争をするための軍備はもたないということをかかげて戦後の新しい歴史を歩みはじめたのです。この再出発に当たっての平和の志を受けついでいく、教会もそのために努力し、とりわけ歴史の主、歴史を導く神にこれを祈り願う、それが今日の平和聖日です。

今年には明治維新（一八六八年）から数えて一五〇年です。前半分七五十年間は、ほぼ十年ごとに戦争をしていました。日清、日露、第一次大戦、日中戦争、そして（教科書でいま何と呼んでいるか分かりませんが）アジア・太平洋戦争です。戦争で死んだ軍人の数を比較すると、日清戦争一万七千人、日露戦争一〇万人、アジア・太平洋戦争では少なく見積もって二三〇万人、これに国内の一般市民、広島・長崎の犠牲者や国内都市の無差別爆撃（空襲）の犠牲者の数は合わせて八〇万人。中国大陸での民衆の犠牲者は一〇〇〇万人、東南アジアでの犠牲者を入れれば一八〇〇万人を越えると推計されています。仙台空襲があったことは皆さんもよく聞いておられると思います。経験された方がここにも多くおられます。一九四五年七月一〇日、夜中、午前〇時三分から二時五分まで、B29爆撃機一二三機が襲来、死者一三九九人、負傷者一六八三人、被災家屋一万九〇〇〇戸、駅から西側中心部が焼け野原になったのです。

それから七三年、ですから明治一五〇年の後の半分は、日本は戦争を経験せずやってきたわけですね。もちろん戦争以外の問題はたくさんありますが、戦争が原因の未解決の国際問題も多く残っています。それには若い皆さんもどうしても向き合わなければならぬ、この日本という国に生まれた人間として。そしてそれらの問題に対する取り組みもふくめて平和を大切にしていこう、これが私たち教会の祈りで、国民みんなの願いだと思います。

ところでいま「平和」という日本語を私も使いながら、どのように使っているのか少し考えてみると一つの特徴のあるのが分かります。日本語で平和という言葉を使う

とき、心配がない、もめごとがない生活、あるいは戦争がない、災害がない、そういう何かがない生活、そういったものを平和といっていることが分かります。高校生の皆さんに平和って何と聞けば、戦争がないことと答えると思います。何かを指して積極的な意味でこれが平和という言い方をしていないということです。聖書でも平和という言葉は重要な言葉です。聖書の平和をあらわす言葉はシャロームといいますがこれはただ戦争がない、もめごとがないというだけではありません。戦争がないことがイコール平和ではない。たとえば二年後にオリンピックがあります。古代ギリシャで始まったものです。町と町、国と国が戦争していても、それをちよつと中断して国際運動会をやった。その間は戦争がないので平和です。でも競技会が終わるとまた戦争をはじめます。

しかし聖書の平和は、神が共におられ、治めておられる、そこに争う理由、戦う理由がない、みんなが互いを受け入れ合っている、そのようにしていつまでもつづく平和、それがシャロームです。争いがあるというのは正しいことがおこなわれていないと感じる人がいるということです。正しいことを聖書で難しい言葉で「正義」といいます。正義がないと争いが起こります。聖書に「正義と平和は口づけし」（詩編八五・一一）という言葉があります。正しいことが行われていることが神の平和の前提であり基礎です。その上で互いに受け入れ合い、また助け合っている、神に造られたものすべてのあいだに調和がある、それが聖書の平和、神の平和、シャロームです。教会で平和のために祈ることは神の平和というかなり高い目標を目指していることになります。

## 2 仕返しをしない

そうした神の平和を求め、そうした平和を生きる上で、私たち自身の在り方として何が大切な、今日の聖書は何とっているでしょうか。

あなたがたも聞いているとおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言っておく、悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい（三八〜三九節）。

「目には目を、歯には歯を」と言い回しはほとんど人が知っている、聞いたことがある言葉だと思います。簡単にいうとやられたらやり返せという意味です。ただ数年前に倍返しなんていう（いやな）言葉がはやったことがありましたが、それは違います。同じことをして返すということです。

倍にして返してはいけない、同じものをもって返すにとめておきなさいというのが趣旨ですから、これは一般にそう考えられているように野蛮の象徴、非文明の象徴ではないのです。復讐、報復の程度、範囲を制限することで、際限のない仕返し合戦に歯止めをかけている。だれか一人がやられたからといって敵の部族を皆殺しにすると

いうようなことがあった。それに比べれば「目には目を、歯には歯を」の原則は人類の進歩を示しています。旧約聖書もだいたいそれにしたがっていた、その法や倫理の基本をなしていました。

しかし人類の進歩を示す、旧約聖書も受け入れてはこの大原則を相手どって、イエスはこういったのです。「悪人に手向かってはならない」。やり返すことをしてはならない、仕返しは、軽い仕返しならいい、範囲を越えなければいいというのではない。仕返しそのもの、報復そのものをイエスは問題にし、これを否定したのです。

こういうイエスに対していろんな疑問が私たちにはあると思います。大きなものは二つではないかと思えます。一つは、臆病という批判です。もう一つは、悪人がのさばって悪の支配を許すことにならないか、ふさわしい対応をすることが正義というものではないか、というものです。

この私たちの二つの疑問に、「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい」というイエスの言葉は答えているように思えます。

臆病なことでしょうか。答えはノーです。ここで使われている「打つ」という言葉は通例棒のようなものでたたたくという意味です。しかしここでは平手で打つという意味で侮辱を意味します。手向かうな、と命じたイエスは、そのまま我慢しなさいといっています。「左の頬も向けなさい」といっています。もう一方の頬も向けよといっています（ルカ六・二九）。これで臆病でないことは明らかです。

もう一つ、悪をのさばらせることにならないかという批判です。「正義」をたてにもし抵抗したなら、それに対する報復は際限なくくり返されて、それこそ悪を生きながらえさせ、断ち切ることを不可能にするのではないのでしょうか。

じつさい、もう一方の頬を向けよ、というのは、ある意味で驚くべき言葉です。悪をきわみまで引き受けなさいということ。悪を行く着くところまで行かせる、行き着くところまで行かせたとき悪は死に絶えます。報復の連鎖はこの私において断ち切られるからです。そう考えれば、仕返ししないことは、悪の支配を許してしまうことではありません。仕返しは神のなさることです。神の怒りにまかせなさい（ローマ一二・一九）。神は悪を許さない。これは誤解してならないことです。私たちが悪人に手向かって悪を根絶できるのではない。イエスと共に十字架の道を歩むのです。少なくとも仕返ししないことは悪をのさばらせることにはならないのです。

### 3 非暴力を生き方にする

悪人に手向かわない、仕返しをしないという方法で、つまり非暴力ノンヴァイオレンスでと言い換えおきましょう、それで悪と闘った実践例があります。

中学生高校生の皆さんもたぶん知っているマーティン・ルーサー・キング牧師のことです。一九二九年生まれの彼は一九六八年四月四日テネシー州メンフィスで三九歳で銃で撃たれて殺された。じつは今年（一九六八年）はキング牧師が死んで五〇年目の記念の年に当たっています。生きていれば八九歳です。

キング牧師はアメリカの黒人解放運動の指導者です。バプテスト派の教会の牧師でした。彼はアメリカの思想家のソロー（1817-62）から市民的不服従を、インド独立の父ガンディー（1869-1948）から非暴力を、しかし決定的にはイエスの山上の説教から（今日の箇所もその一部）学び、非暴力という方法で人種差別の反対運動をし、公民権法の成立（一九六八年）に寄与し、ノーベル平和賞（一九六四年）も受賞したひとです。ワシントン大行進の時の「私には夢がある」という演説（一九六三年）でも知られています。

彼を有名にしたのは、大学院を出て、人種差別のとりわけ激しかった自分の出身地でもある南部のアラバマ州モントゴメリーのデクスター教会に赴任し、牧師としての活動をはじめ、一年目、大規模なバス・ボイコット運動（一九五五年）がはじまり彼がその指導者になってからです。

モントゴメリーは人口一二万のうち黒人は四割ぐらいでした。バス乗車についても人種差別があった。前のドアと後ろのドアがあり、黒人は前から乗ってお金を払いつつ降りて後ろにまわって乗ります。中はどうなっていたかというところ、前が白人専用席、後ろが黒人用です。白人席がいっぱいになると、後ろの黒人席の人は、列全部が立って席を譲らなければならない。運転手（これはみな白人）がバックミラーを見て、いっぱいになったので、黒人席の人は立って白人に席を譲るように言った。四人座っていて三人は立ったのですが、一人の婦人が立たなかった。運転手は口汚く罵り警察が呼ばれ、結局逮捕されてしまうのです。

バス乗車の差別撤廃のためにキングたちはバス・ボイコットという戦術を打ち出します。一年間、黒人たちは、バス乗車を拒否し、車に乗り合せたり、職場まで歩いたり、抗議をつづけた。白人からの反発はつよく、暴力をふるわれたり、しばしば命の危険まで経験しながら、ついに一つの権利をかちとっていったのです（キング著『自由への大いなる歩み』岩波新書）。その時とられた方法が非暴力でした。仕返しをしない、どんなにひどいことをされても良心的に振る舞う。愛は目的であるとともに手段だということです。最近知ったのですが、そのときもキングはまだ護身用のピストルをもっていて、ラストインとスマイリーという平和活動家と話し合う中で、それを捨てた。非暴力を生き方にしたと最近伝記を書いた黒崎真さんがいっています（『マーティン・ルーサー・キング 非暴力の闘士』（黒崎真著、岩波新書、二〇一七年）。一年後、連邦最高裁判所はバス乗車における人種差別を違憲と判断し、ボイコット運動は終息、人種隔離バスは廃止されたのです。

どう総括したらよいでしょうか。イエスの教えた高い倫理が現実的な力をもつことがキングを通して証しされたといつてよいと思います。そのためには神への信仰と神に従う心が必要でした。今日礼拝と一緒に守った若い人たちはやはりいろいろ学校の教科を勉強してほしいと思います。聖書も勉強し、両方勉強して自分の生き方をつかんでいってほしいと思います。

（二〇一八年八月五日）